

蒲池小学校

いじめ防止基本方針



令和6年4月
柳川市立蒲池小学校

【目 次】

第1章 I いじめ防止に対する本校の考え方	2
1 基本理念	2
2 いじめの定義	
3 いじめの背景	3
4 いじめ防止のための組織	
第2章 いじめの未然防止	4
1 基本的な考え方	4
2 いじめ未然防止のための措置	
第3章 いじめの早期発見	5
1 基本的な考え方	5
2 いじめの早期発見のための措置	
3 具体的取り組み（年間計画）	6
第4章 組織対応	7
1 いじめが起きた場合の組織的対応の流れ	7
2 監督官庁、警察、地域等の関係機関との連携	8
第5章 重大事態への対処	8
1 重大事態の定義	
2 重大事態への対処	9
※ 資料〈人間関係トラブルの早期発見チェックポイント〉	11

第1章

いじめ防止に関する本校の考え方

1 基本理念

いじめは、いじめを受けた児童の教育を受ける権利を著しく侵害し、その子どもの将来にわたって内面を深く傷つけるものであり、子どもの健全な成長に影響を及ぼす、まさに人権に関わる重大な問題である。生命または身体に重大な危険を生じさせる恐れがあることから、いじめ問題への対応は喫緊の重要課題であると言える。従って、全教職員が、いじめはもちろん、いじめをはやし立てたり、傍観したりすることは絶対に許されないという姿勢で、どんな些細なことでも必ず親身になって相談に応じる事が大切である。そのことが、いじめの発生・深刻化を防ぎ、いじめを許さない児童の意識を育成することになる。

そのためには、学校として教育活動の全てにおいて生命や人権を大切にする精神を貫くことや、教職員自身が、児童一人ひとりを多様な個性を持つかけがえのない存在として尊重し、児童の人格のすこやかな発達を支援するという児童観、教育観に立って指導を徹底することが重要となる。

本校では、教育目標「自ら考え、責任をもって判断・行動し、たくましく生きる蒲池っ子の育成」に向けて、人間形成教育を行っている。全ての児童の健全な成長のために人権教育に重点を置くものとし、いじめは重大な人権侵害事象であるという認識のもとに、ここに学校いじめ防止基本方針を定める。

2 いじめの定義

《いじめ防止対策推進法における定義》

第2条 この法律において「いじめ」とは、児童等に対して、当該児童生徒が在籍する学校に在籍している等当該児童等と一定の人的関係にある他の児童等が行う心理的又は物理的な影響を与える行為（インターネットを通じて行われるものも含む。）であって、当該行為の対象となった児童等が心身の苦痛を感じているものをいう。

2 この法律において「学校」とは、学校教育法（昭和22年法律第26号）第1条に規定する小学校、中学校、高等学校、中等教育学校及び特別支援学校（幼稚部を除く。）をいう。

3 この法律において「児童等」とは、学校に在籍する児童又は生徒をいう。

- 「一定の人的関係」とは、学校の内外を問わず、同じ学校・学級や部活動の児童や、塾やスポーツクラブ等当該児童が関わっている仲間や集団（グループ）など、当該児童との何らかの人的関係を指す。
- 「心理的又は物理的な影響」とは、いじめの態様のことである。具体的には次のような態様を指し、いじめられた児童の被害性に着目し、法が規定するいじめに当たるか否かを見極める必要がある。

 心理的な影響：冷やかしやからかい、悪口や脅し文句、嫌なことをいわれる。仲間はずれ、集団による無視をされる。パソコンや携帯電話等で誹謗中傷や嫌なことをされる。等

 物理的な影響：嫌なことや恥ずかしいこと、危険なことをされたり、させられたりする。ぶつかられたり、叩かれたり、蹴られたりする。金品をたかられる。金品を隠されたり、盗まれたり、壊されたり、捨てられたりする。等

○ いじめの対応にあたっては、いじめられたとする児童の立場に立ち、いじめがあったという認識のもとで受容的に接するとともに、いじめられた児童を全面的に支援する。

また、学校にあっては、児童間のトラブルを法の「いじめの定義」に照らして指導するのではなく、児童間のトラブルは軽微なものを含めて、常にその解消に向けて指導することが必要である。定義はあくまで法の対象としての指標であり、定義に左右されることなく、学校は常に子どもの状況を見守り、よりよい人間関係を築けるよう指導する必要がある。

いじめは、どの子どもにも、どの学校でも起こりうるものである。とりわけ、嫌がらせや意地悪などの「暴力を伴わぬいじめ」は、多くの児童が入れ替わりながら被害も加害も経験する。また、「暴力を伴わぬいじめ」であっても、何度も繰り返されたり多くの者から集中的に行われたりすることで、「暴力を伴ういじめ」と同様に、生命または身体に重大な危険を生じさせ得る。

また、いじめの加害・被害という2者関係だけでなく、学級や社会体育等の所属集団の構造上の問題、「観衆」としてはやし立てたり、面白がったりする存在や、周辺で暗黙の了解を与えていたりする「傍観者」の存在にも注意を払い、集団全体にいじめを許容しない雰囲気が形成されるようにすることが必要である。

3 いじめの背景

(1) 学校における要因

- ・学級等の集団の中で自己存在感が薄い。
- ・集団の中で自己表現する能力が低い。
- ・自己中心的な児童が増えてきている。
- ・社会で許されないことは学校でも許されないことの指導が徹底されていない。

(2) 家庭における要因

- ・基本的な生活習慣や生活態度が十分に教育されていない。
- ・思いやりや正義感、善悪の判断についての指導が徹底されていない。
- ・親子の間に必要な会話を通した信頼関係が希薄化しつつある。
- ・「いじめは人間として絶対に許されない行為である」との基本的な考え方が十分に徹底していない。
- ・親自身が子どもに対するしつけに不安を抱いている
- ・父親が家庭で子どもと触れ合う機会が少ない。

(3) 地域社会における要因

- ・住民の連帯意識が希薄化し、地域全体で子どもを育てるという意識が低下している。
- ・都市化の進展等社会の変化は、子どもの遊びの場や時間にも影響を及ぼし、量的・質的な変化をもたらしている。

(4) 社会全体の要因

- ・異質なものを排除するという社会に広くみられる同質志向の意識にも問題があると考えられる。
- ・社会全体に人間関係が希薄化してきている。
- ・大人の社会にみられるモラルを欠いた行動が子どもたちに影響を与えている。

4 いじめ防止のための組織

(1) 名称：「いじめ問題対策委員会」の設置

(2) 構成員：校長、教頭、主幹教諭、生徒指導担当、養護教諭

【緊急時】 担任 【必要に応じて】 外部専門家（SSW、SC等）

(3) 役割： ① 学校いじめ防止基本方針の策定 ② いじめの未然防止

- | | |
|----------------|--------------------|
| ③ いじめの対応 | ④ 教職員の資質向上のための校内研修 |
| ⑤ 年間計画の企画と実施 | ⑥ 年間計画進捗のチェック |
| ⑦ 各取り組みの有効性の検証 | ⑧ 緊急対応 |

第2章

いじめの未然防止

1 基本的な考え方

いじめの未然防止にあたっては、人権に関する知的理理解および人権感覚を育む学習活動を各教科、学級活動、行事活動等それぞれの特質に応じ総合的に推進する必要がある。これらの活動を通して、児童が他者の痛みや感情を共感的に受容するための想像力や感受性を身につけ、対等で豊かな人間関係を築けるように、全教職員は目的意識を持って日々取り組まねばならない。そうすることにより、当事者同士の信頼ある人間関係づくりや人権を尊重した集団としての質を高めていくことが必要である。

2 いじめ未然防止のための措置

(1) いじめについての共通理解

いじめの様態や特質、原因・背景、具体的な指導上の留意点などについて、職員会議や校内研修で周知を図り、平素から教職員全体の共通理解を図る。また、児童に対してもホームルームや学年・学級活動などで、適宜いじめの問題について触れ、「いじめは絶対に許されることではない」との雰囲気を学校全体に醸成していく。

(2) 教育課程に位置づいた、計画的な未然防止の準備

イベント的な取組だけでなく、日々の授業の中で行われる働きかけも含め、年間を通して適切に配置され、繰り返し行われる未然防止の取組が、「学校いじめ防止基本方針」の柱となることの共通理解のもと、適切な教育課程を編成する。

＜未然防止のための日々の取組＞

いじめ、とりわけ「暴力を伴わぬいじめ」については、ほとんどの児童が被害経験はもちろん、加害経験も持つことが分かっている。「いじめの被害者や加害者を早い段階で特定して対処する」という早期発見型ではなく、「全ての児童のいじめ被害・いじめ加害の可能性を減らしていく」という未然防止型の姿勢を大切にしていく。

日々の授業場面で、児童が互いに傷つけ合ったり、相手を馬鹿にしたりするような言動が放置されていないだろうか。あるいは、教師がそうした言動を軽い気持ちで行っているということはないだろうか。「いじめている」という明確な自覚の有無にかかわらず、あるいはいじめと呼ぶべき行為かどうかにかかわらず、児童のトラブルが減り、児童が安心・安全に過ごせる学級や学校にしていくこと(＝居場所づくり)が、いじめの未然防止の第一段階である。

また、思いやりや規範意識、すなわち相手や周りを気遣おうとする態度、他者や集団との関わりを大切にしたいという意欲を育むことも大切である。道徳的な知識や人間関係のスキル以前に、こうした「思い」を育んでおかなければ、単に知識を与えただけ、技能を訓練しただけにとどまり、いじめの未然防止にはつながらない。授業場面も含め、児童自らが実際に他者と関わり合う中で、彼ら自身の内からそうした思いがわきでてくる場や機会を提供していくこと(＝絆づくりのための場づくり)が、いじめの未然防止の第二段階である。

第3章

いじめの早期発見

1 基本的な考え方

いじめは大人の目につきにくい時間や場所で行われたり、遊びやふざけ合いを装って行われたりするなど、気づきにくく判断しにくい形で行われるという認識の上に立つ。たとえささいな兆候であっても、いじめではないかとの疑いを持って、早い段階から複数の教職員で的確に関わり、いじめを隠したり軽視したりすることなく、いじめを積極的に認知するよう努める。また、日頃から児童の見守りや信頼関係の構築等に努め、児童が示す小さな変化や危険信号を見逃さないようアンテナを高く保つとともに、教職員相互が積極的に児童の情報交換を行い、情報を共有する。

2 いじめの早期発見のための措置

- (1) 学校は、休み時間や放課後の児童の様子に目を配る等して日々児童観察を行うことにより、いじめの早期発見に努める。また、毎月のアンケート調査や定期的な教育相談の実施等により、いじめの実態把握に取り組むとともに、児童が日頃からいじめを訴えやすい雰囲気をつくる。
- (2) 家庭における保護者のいじめチェック等を活用し、家庭と連携して児童を見守り、健やかな成長を支援していく。
- (3) 児童や保護者の悩みを積極的に受け止められているか、適切に機能しているか等、定期的に体制を点検し、SSWやSC等の利用について広く周知させることにより、児童および保護者、教職員がいじめに関して相談しやすい体制を整備する。
- (4) 教育相談等で得た、児童の個人情報については、対外的な取り扱いの方針を明確にし、適切に扱うものとする。

3 具体的取り組み(年間計画)

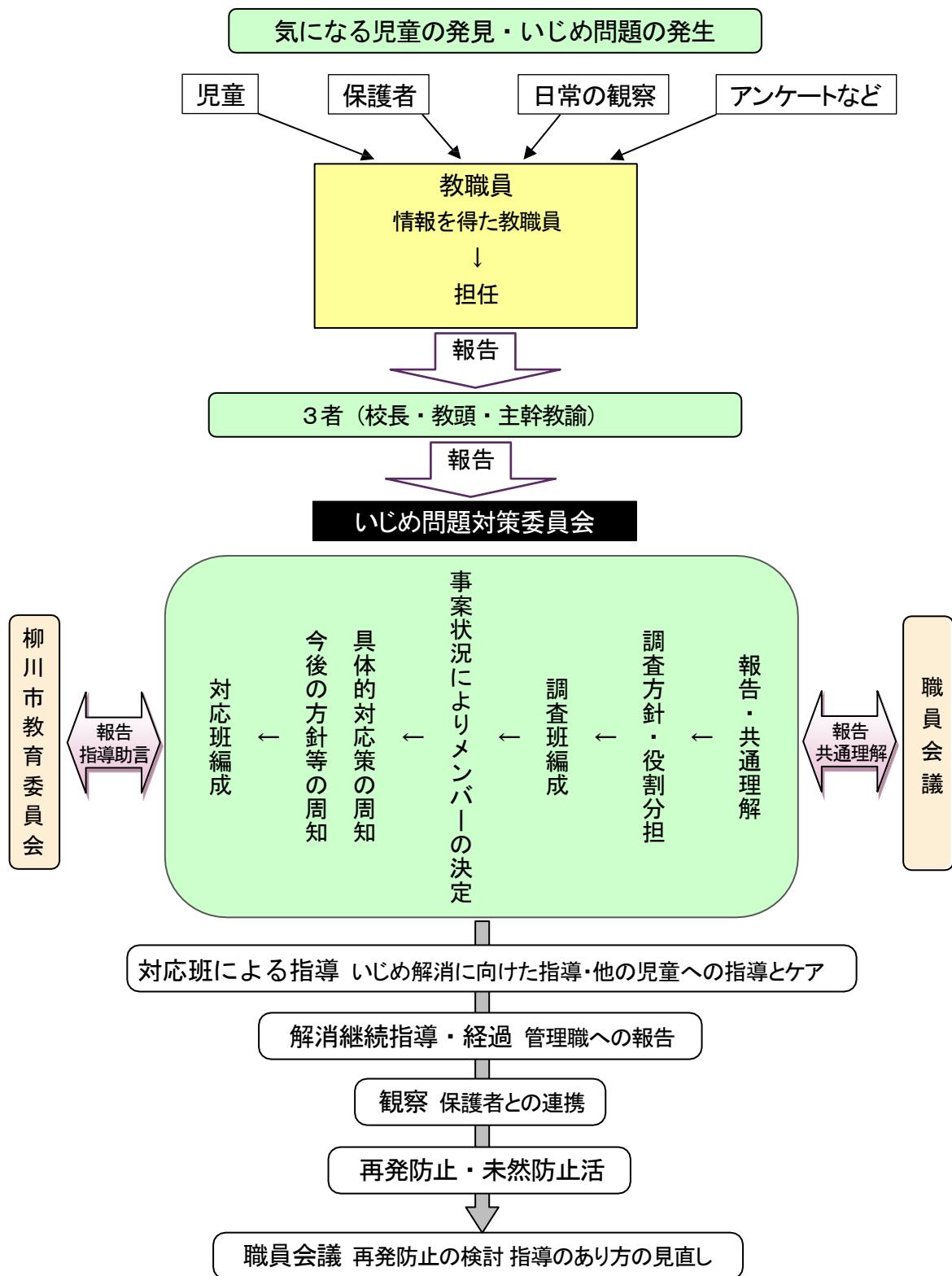
月	教育活動	情報収集	教育相談	職員研修
4	毎月 いじめチェック (担任による早期発見)	毎月 いじめアンケート (児童へ)	教育相談週間 (毎月第2週) 毎月 生徒指導委員会	
5			◎教育相談強調月間	
6				いじめに関する研修会①
7	同和問題強調月間の取組	いじめチェックリスト (保護者へ)		
9	5年生「親子で学ぶ規範意識育成学習」(ネットいじめ等情報モラル)			
10				
11				
12	人権週間の取組	いじめチェックリスト (保護者へ)		いじめに関する研修会②
1				
2	↓	↓ いじめチェックリスト (保護者へ)	↓	
3				

- ・「いじめ・人間関係トラブルの早期発見チェックポイント」(資料1)を活用して、学級担任等が各月1回のチェック日を定期的に設け、いじめの早期発見に努める。
- ・毎年5月を「教育相談強調月間」と位置づけ、いじめは勿論、不登校及びその他、児童の悩みの解消に努める。
- ・担任は毎日の健康観察を活用し、子どもの変化を観察すると共に、保健室への来室状況等の情報を養護教諭と共有し、連携して、早期発見に日常的に取り組む。
- ・日常的に電話や連絡帳でのコミュニケーション、必要に応じた家庭訪問等を通じて、家庭と連携して早期発見に努める。
- ・校内に相談ポストを位置づけ、直接相談できない児童へも配慮した相談体制を整備する。
- ・SSWやSC等外部専門家との連絡調整に当たる係として教育相談担当(教頭・養護教諭)を配置し、相談体制の整備・充実を図る。

第4章

組織対応

1 いじめが起きた場合の組織的対応の流れ



2 監督官庁、警察、地域等の関係機関との連携

(1) 監督官庁との連携について

学校において重篤ないじめを把握した場合には、学校で抱え込むことなく、速やかに監督官へ報告し、問題の解決に向けて指導助言等の必要な支援を受ける必要がある。解決が困難な事案については、必要に応じて警察や福祉関係者等の関係機関や弁護士等の専門家を交えて対策を協議し、早期の解決を目指す。

(2) 出席停止・転学退学措置について

他の児童の心身の安全が保障されないなどの恐れがある場合については、いじめ防止対策委員会と生活指導部が連携し、出席停止等の懲戒処分の措置を検討する。出席停止の制度は、本人の懲戒という観点からだけではなく、学校の秩序を維持し他の児童の教育を受ける権利を保障するという観点から設ける事もある。また、いじめられた児童の心身の安全が脅かされる場合等、いじめられた児童をいじめから守りぬくために、必要があればいじめた児童に対し転学や退学について弾力的に対応する。

(3) 警察との連携について

学校でのいじめが暴力行為や恐喝など、犯罪と認められる事案に関しては、早期に所轄の警察署や児童相談所に相談し、連携して対応する。児童の生命・身体の安全が脅かされる場合は直ちに通報する場合がある。

第5章

重大事態への対処

1 重大事態の定義

《いじめ防止対策推進法における定義》

第28条 学校の設置者又はその設置する学校は、次に掲げる場合には、その事態(以下「重大事態」という。)に対処し、及び当該重大事態と同種の事態の発生の防止に資するため、速やかに、当該学校の設置者又はその設置する学校の下に組織を設け、質問票の使用その他の適切な方法により当該重大事態に係る事実関係を明確にするための調査を行うものとする。

- 一 いじめにより当該学校に在籍する児童等の生命、心身又は財産に重大な被害が生じた疑いがあると認めるとき。この法律において「学校」とは、学校教育法(昭和22年法律第26号)第1条に規定する小学校、中学校、高等学校、中等教育学校及び特別支援学校(幼稚部を除く。)をいう。
- 二 いじめにより当該学校に在籍する児童等が相当の期間学校を欠席することを余儀なくされている疑いがあると認めるとき。

- 「いじめにより」とは、各号に規定する児童生徒の状況に至る要因が当該児童生徒に対して行われるいじめにあることを意味する。
- 第1号の「生命、心身又は財産に重大な被害」については、いじめを受ける児童生徒の状況に着目して判断する。
 - (例) ・児童生徒が自殺を企画した場合
 - ・身体に重大な傷害を負った場合
 - ・金品等に重大な被害を被った場合
 - ・精神性の疾患を発症した場合
- 第2号の「相当の期間」については、不登校の定義を踏まえ、年間30日を目安とする。但し、児童生徒が一定期間、連続して欠席しているような場合には、上記目安にかかわらず、学校の設置者又は学校の判断により、迅速に調査に着手することが必要である。
- 児童生徒や保護者からいじめられて重大事態に至ったという申し立てがあったときは、その時点で学校が「いじめの結果ではない」あるいは「重大事態とは言えない」と考えたとしても、重大事態が発生したものとして報告・調査に当たらなければならない。

2 重大事態への対処

(1) 重大事態の発生と調査

- 重大事態が発生した場合、直ちに学校の設置者(市→県)に、事態発生について報告する。
- 事実関係の明確化及び事態への対処・再発防止のための調査を行う。
- 学校の調査では必ずしも十分な結果が得られないと判断される場合や、学校の教育活動に支障が生じる恐れがある場合には、市教育委員会に於いて調査を行う。

(2) 調査を行うための組織

- 「いじめ問題対策委員会」を母体として、市教育委員会・県教育委員会と連携し、当該重大事態の性質に応じて適切な外部専門家を加える等の方法により組織する。
- 組織に加える専門家は、当該事案の関係者と直接の人間関係又は特別の利害関係を有しない者とし、調査の公平性・中立性を確保するよう努める。

(3) 事実関係を明確にするための調査の実施

- 重大事態に至る要因となつたいじめ行為が、いつ(いつ頃から)、誰から行われ、どのような態様であったか、いじめを生んだ背景事情や人間関係にどのような問題があったか、学校・教職員がどのように対応したかなどの事実関係を、可能な限り網羅的に明確にする。(客観的な事実関係を速やかに調査)たとえ、不都合なことがあったとしても、事実にしっかりと向き合おうとする姿勢で調査に臨むことが重要である。

(4) 調査結果の提供及び報告

《いじめ防止対策推進法における定義》

第28条第2項 学校の設置者又はその設置する学校は、前項の規定による調査を行ったときは、当該調査に係るいじめを受けた児童等及びその保護者に対し、当該調査に係る重大事態の事実関係等その他の必要な情報を適切に提供するものとする。

- いじめを受けた児童生徒やその保護者に対して、事実関係等その他の必要な情報を提供する責任を有することを踏まえ、調査により明らかになった事実関係について説明する。(適時・適切な方法で経過報告)また、他の児童生徒のプライバシー保護に配慮するなど、関係者の個人情報に十分配慮し、適切に情報提供する。
- 調査結果は、市長に報告する。併せて、県教育委員会にも報告する。更に、いじめを受けた児童生徒又は保護者が希望する場合には、所見をまとめた文書の提供を受け、調査報告書に添付して地方公共団体の長等に送付する。

【参考・引用】

「福岡県いじめ問題総合対策」 平成19年2月 福岡県教育委員会

「柳川市いじめ問題総合対策」 平成19年4月 柳川市教育委員会

「福岡県いじめ防止基本方針」 平成26年4月 福岡県

〈いじめ・人間関係トラブルの早期発見チェックポイント〉

チェック項目			4月	5月	6月	7月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
登校時から朝の会	1	はっきりした理由もなく欠席する。											
	2	健康観察で頭痛・腹痛・体調不良をよく訴える。											
	3	遅刻・早退が目立っている。											
教科等の時間	4	特定の児童が間違えたり失敗したりすると、やじられたり笑われたりしている。											
	5	特定の児童に対し、周囲の児童が机・椅子を離して座ろうとしている。											
休み時間	6	どのグループにも入れず、一人でポツンとしている。											
	7	遊びの中で笑い者にされたり、からかわれたり、命令されたりしている。											
昼食時間	8	特定の児童が配膳をすると、周りの子が受け取ろうとしない。											
	9	グループ(班)を作つて会食する時、特定の児童の机だけが、他の子の机から少し離されていたり、そのまま机等がぽつんと残されたりしている。											

帰 り の 会 か ら 下 校 時	10	何か事が起きると、いつも特定の児童のせいにされる。										
	11	用事がないのに教師の近くや職員室の周りをうろうろしている。										
	12	帰るときになって特定の児童の下靴等がなくなっていることが分かり、捜してもなかなか見つからない。										
学校 生 活 全 般	13	いやなあだ名をしつこく言われたり「キモイ・ウザイ」等と非難されたりする。										
	14	席替えや班決めで、特定の児童の隣や近くの座席をいやがる。										
	15	グループ分けなどで最後まで所属が決まらない。										
	16	個人の持ち物が紛失したり、壊されたり、いたずら書きされたりしている。										